

野の仏さまにおききました

2022.12.26(月) NO3



如意輪観音菩薩(獅子窟寺・三十観音の道)

思いのままに救ってくださる観音さん。「如意」をストレートに、思うようになること・おもいそのままと理解して、すべて「欲しいものをみな思う通りにかなえて下さる観音さま」と、自分の都合いいように考えがちですが、ちょっとお待ちよ道ゆく人、「如意(おもいのまま)」というのは私たち側ではなく、「観音さまの思いのまま」ということです。観音さまのこころは、悩める人びとをすくいたいというご誓願からです。

「次の章句」について教え

「論語」とは多くの日本人に愛され、親しまれてきました。

古くくて、難しそうだが決して堅苦しい内容ではなく、そこには孔子(前 552-前 479)という人物の豊かで深い心情が織り込まれています。

あるいはすでに論語の言葉に親しんでおられる方も、あるかと思いますが。

論語は、日本では、江戸時代の寺子屋や藩校などで一番盛んに読まれていたといわれています。

若い人を育てるときの教科書となっていたようです。

優しい気持ちや ^{おもんばか}慮り、あるいは、努力する心、言いわけしない ^{いさぎよ}潔さ、人との距離のはかり方など、日本人らしさ

ともいえる考え方のもととなるものが「論語」には、たくさんあるので長く広く読まれてきたのだと思われます。

人びとの心の拠りどころとなり、日本人の美しく強い精神世界の根幹をなしてきたものの一つといえるでしょう。

それでは次の章句

^{のたまわく}
子曰わく 吾十有五にして学に志し

三十にして立ち 四十にして惑わず 五十にして天命を知り

六十にして ^{みみしたが}耳順い 七十にして心の欲する所に ^{のり こえ}従えども 矩を踰えず。

*子曰く「しのたまわく」…おっしゃいました(敬語)。「しいわく」とよめば…言いました(一般)。

「子」というのは、先生という意味です。ここでは子(野の仏)と読み替えて下さい。

野の仏さんに解説お願いしました

過去のことをよく学び、今の世の中に活かしていきたいというのが孔子の考えで、その志をたてたのが十五歳の頃だったということになります。

下級の役人からスタートした孔子は、社会人として働きつつ、古典を学び、研鑽を積んでいきます。

三十歳になったときにどうやら学問の世界でもやっていけそうだと、めどが立ちました。

この頃に弟子がつき始め、自分が学んだことを、若い弟子たちに語るようになったのではないかと思います。

そこからさらに、社会人としても、学者としても研鑽を積んでいきます。

四十歳になったときに、善悪などの価値観や物事の道理が理解できるようになったので、惑われなくなった。

実際にどう行動すれば道理にかなっているのか、という部分ではまだまだ悩みもあったのだと思います。

そして、五十歳になって「天命」がわかった。

天命とは、天が人間に与えた使命のことです。私たちは、天から使命を与えられてこの世に生まれてきた、というのが孔子の考えです。自分が何をすべきか、その使命がわかったということです。

孔子は五十代半ば政治の要職に就きます。

大臣として、司法長官という重要なポストに就き、能力を発揮できる時がきました。孔子には野心家の面もあり、高い地位を得たいという欲求を持っていました。

ようやくそういう場面が訪れるわけですが、それも長くは続きません。まもなく失脚し、公職を退いてからは長い放浪の旅に出ます。その道中では、さまざまな人物との出会いや別れがあったはずですが。

そして戦乱の世に、自分の考えや思想哲学を諸国で説いてまわります。

さらに十年、そろそろ人生の円熟期に入ります。六十歳で人の話を素直に聞けるようになり、充分理解できるよう

になった。学問を続け、経験を重ねていくと学識が豊かになる、あるいは人柄に幅が出る。

また、体力的には衰えてくる、苦難の時期でもあった。

「矩を踰えず」とは、決まり事を超えないということ。

七十歳になったときには、意識して理性を働かせることなく、自分がやりたいように振る舞っても、それが社会人として常識の中に収まっていたという意味です。 以上!

十五・三十・五十・六十・七十と過ぎ去りし年月、どうだったかと「野の仏さんに聞かれました。

私曰く八十にして…、九十にして、百にして…、これからの人生を考えますと。

「戦」



Hp より

2022年あなたは何と戦いました?

勝ちましたか?・負けましたか?・それとも途中棄権しましたか?

了

(参考資料)安岡定子の「やさしい論語

信ずる心「観音菩薩」

*「野の仏」の写真は交野市内で撮影したもので、文と一致したものではありません